

新刊紹介

**Maya Jasanoff 著 *The Dawn Watch:
Joseph Conrad in a Global World***

London: William Collins, 2017. xvii + 375pp.

山本 薫

本書は、帝政ロシアの被支配民として生まれ、船乗りとして世界を放浪した後、当時最も「グローバルな」ヨーロッパの資本主義帝国の臣民となったコンラッドの人生の軌跡を具体的なコンテクストの中で辿りながら、「闇の奥」(‘Heart of Darkness’, 1902)、『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)、『ノストロモ』(*Nostramo*, 1904)、『密偵』(*The Secret Agent*, 1907)を彼が生きた時代の「歴史小説」として読み解くと同時に、グローバル化した現代社会が抱える諸問題を予言する書としても位置づけようとする実に readable な評伝である。テロの時代に、『密偵』のコンラッドは以前にも増して予言者と見なされるようになった。その意味では本書の主張はそれほど珍しいものではないし、先回りして言ってしまうと、本書が提供する解釈は、コンラッド文学について何か特別新しい発見をもたらすわけではない。しかしながら本書の強みは、何よりもその読みやすさにある。高校の授業で初めて『ロード・ジム』に出会い、大学では英文学を専攻しようとしていたものの、「歴史を文学として書く」ことを提唱していた Mark Kishlansky の授業で歴史の語りの力に目覚めて以来、歴史と文学双方への関心を失わなかったという著者 Maya Jasanoff の流れるような歴史叙述は、‘a bloody racist’ (Chinua Achebe) や ‘a writer who is missing a society’ (V.S.Naipaul) といったイメージからコンラッドを解放し、むしろ帝国主義・資本主義批判においてアチェベの「兄弟」、テロと移民・難民の時代の我々の同時代人(‘one of us’)として蘇らせる。¹ 淀みなく流れる本書の語

¹ Colm Tóibín, ‘The Heart of Conrad’, *The New York Review of Books*, February 22, 2018(<https://www.nybooks.com/articles/2018/02/22/the-heart-of-conrad/>); 柴田元幸、亀のみぞ知る—海外文学定期便— (3)「ジョゼフ・コンラッドはわれらの同時代人」*The Dawn Watch: Joseph Conrad in a Global World* by Maya Jasanoff (2018年10月2日 <http://kangaeruhito.jp/articles/-/2625>)

り口は、難解でとらえどころがないという理由でコンラッドを敬遠していた読者にとっては歓迎すべきものだろうし、アチエベの影響でコンラッドからしばらく遠ざかっていたケニアの作家 Ngũgĩ wa Thiong'o の場合のように、玄人の読者にとってもコンラッド再訪を促すものとなるだろう。²

歴史家であるジャサノフは、コンラッドの小説の主題と彼女の関心との親和性を窺わせる著書——インドとエジプトにおける英国の植民地政策を検証した *Edge of Empire: Lives, Culture, and Conquest in the East, 1750-1850* (Knopf, 2005)、アメリカ革命後カナダ、カリブ、英国、シオラ・レオーネへと分散していった英国王党派(Loyalists: アメリカ独立戦争で革命側に対して英国を支持した植民地の住人)の歴史 *Liberty's Exiles: American Loyalists in the Revolutionary World* (Knopf, 2011) ——によって既に歴史の分野で数々の賞を受賞している。本書 *The Dawn Watch* も、上述の小説家ジオンゴや Colm Tóibín をはじめ、John le Carré、『ノストロモ』を下敷きにした歴史小説『コスタグアナ秘史』の著者 Juan Gabriel Vásquez 等錚々たる文人によって賞賛されていて、2018年には歴史の分野で最もインパクトのあったノンフィクションに与えられる Cundill History Prize を受賞した。

一方で本書は、「文学」を歴史の単なる「対象」として扱っているという批判も受けている。³ 確かに、新歴史主義とは違ってテキストとコンテキストをはっきりと区別し、具体的な「歴史的背景」の中でコンラッドの人生の軌跡を追っていくジャサノフのオーソドックスなアプローチが、コンラッドの作品の中でも最も重層的で難解な「闇の奥」『ロード・ジム』『ノストロモ』『密偵』といった作品の議論で成功しているとは必ずしも言えず、還元主義の誹りは免れないだろう。『密偵』を論じた第3章がその最たる例だ。一見探偵小説の体裁をとっている『密偵』を、1900年代初頭には既に過去のものとなっていたアナキズムの「歴史小説」として読もうする第3章の議論それ自体には説得力があるかもしれないが、かといっ

² Ngũgĩ wa Thiong'o, 'The Contradictions of Joseph Conrad', *The New York Times*, Nov. 21, 2017 (<https://www.nytimes.com/2017/11/21/books/review/dawn-watch-joseph-conrad-biography-maya-jasanoff.html>)

³ 例えば、Keith Carabine, <http://www.josephconradsociety.org/reviews/keith-jasanoff.pdf>; Padraic X. Scanlan, *LSE Review of Books* (<https://blogs.lse.ac.uk/lserewofbooks/2018/01/17/>)

てそれが『密偵』の入り組んだ語りの効果を論じ切れるわけではなく、結果としてやや物足りない印象は拭えない。『ノストロモ』を新世界秩序の出現を予言する書として読もうとする(トビーンも絶賛の)第11章と比べれば、割かれた頁数の面でも内容の面でもどうしても見劣りすると言わざるを得ない。

それでも、「白人の野蛮人」(「闇の奥」を論じた第3部9章のタイトル‘White Savages’でもある)によるコンゴの奴隷の大虐殺を、「最も暗く impenetrable な『闇の奥』は暗黒大陸アフリカにあるのではなく人間精神の中にある」というレトリックに回収し、「歴史家であって a literary critic ではない」ジャサノフには「闇の奥」という傑作の複雑さが理解できていない、というコンラッド批評⁴の側の主張を、文学の立場を代表するものとして支持することはまず無理だろう。我々が現在常識としている歴史＝科学、文学＝人文学という区分はたかだか19世紀に始まった考えであり、(論理としての)歴史と(テキストとしての)文学は古代のレトリックという起源を共有している。歴史が自らの文学性を切り捨てることによって、大学という制度の中で実証科学としての地位を確立したのは、19世紀後半のことであり、⁵ その頃の文壇の周辺で遅咲きの作家としてなんとか身を立てようと悪戦苦闘していたコンラッドもそのことに無関心ではなかった。⁶ 例えば『ロード・ジム』や『ノストロモ』、あるいは「決闘」(‘The Duel’, *A Set of Six* [1908])や「武人の魂」(“Warrior’s Soul”, *Tales of Hearsay* [1925])のような歴史小編でも、コンラッドはたびたび歴史(法廷で明かされる事実[『ロード・ジム』]、コスタグアナの「歴史」[『ノストロモ』]、ナポレオン戦争[「決闘」「武人の魂」])とフィクション(マーロウの語り、ゴシップや噂話)を合流させ、歴史とフィクションの境界線を曖昧にしている。

⁴ Carabine, 同上。

⁵ イヴァン・ジャブロンカ、真野倫平訳『歴史は現代文学である—社会科学のためのマニフェスト』(名古屋大学出版会、2018), 180, 210-220。

⁶ ジャブロンカも、単純さ・正確さ・透明さは歴史の専売特許ではなく、文学的であり、「裸の歴史」さえもが内在的に文学的であると述べ、「明晰で簡潔な文体や普通の句読法が文学の重要な障害であるようには見えない」(‘Outside Literature’, *Last Essays*, 39 [London: Dent, 1963])というラ・ロシュフーコーの『箴言集』についてのコンラッドの言葉を引用している。前掲書、215。

ジオンゴやトビーンのような「歴史小説家」を魅了するのも、ただ単純にジャサノフが明らかにする歴史的事実とフィクションの照応関係よりは、歴史的事実とフィクションをリンクさせようとする彼女の創造性であり、川のように流れる語り口である。ジャサノフは、「闇の奥」の冒頭でマーロウがテムズ川を見てコンゴ川を思いだす挿話に触れ、マーロウが言いたかったのはイングランドよりアフリカが原始的だということではなく、歴史は寄せては返す川の流れのようだということだと述べている(237)。川を「自然のプロットライン」(200)に例えるジャサノフは、コンゴ川やテムズ川などのコンラッドの人生と作品の中で重要な実際の川を、コンラッドの人生を再構成する物語＝歴史の「プロットライン」に見立てて合流させ、我々読者をあちらこちらへと導く。

まず、本書の始まり(プロローグ)は、コンラッドのアフリカへの旅を追体験しようとする彼女自身のコンゴ川遡行の旅の始まりと重ねられている。続く‘Nation’、‘Ocean’、‘Civilization’、‘Empire’と題された4つの部ではそれぞれ表題の切り口でコンラッドの人生をほぼ年代順に辿っていくが、必ずしも作品を出版年順に取り上げていくわけではない。「闇の奥」を論じている第3部第8章で、ジャサノフは、「闇の奥」が指示するコンゴの特定の現実ばかりでなく、執筆過程での経験や考えの中に作品の意味は求められるべきだ(214)と述べているが、そうして本書は出版年ごとに作品を追うだけでは見えてこない事情の中でコンラッドが当該作品を書いた様子を浮かび上がらせようとする。例えば、コンラッドの幼少期を描いた第1、2章で、ロシア帝政下でのコンラッド一家の苦勞から謎に満ちたマルセイユ時代までを扱った後、第3章(‘Among Strangers’)でジャサノフは、増加する移民への風当たりや取り締まりが次第に厳しくなり、もはや「アナキスト」という言葉はテロリズムそのものへの恐怖とともに用いられる言葉というよりは、「犯罪者」や「怪しい外国人」を暗に意味するようになっていた(80)頃にコンラッドが『密偵』を書き始め、物語の舞台をグリニッジ天文台爆破事件が起こった1894年ではなく、彼が英国籍を取得した1886年に置いた(83)事情を探る。こうして彼女は『密偵』を探偵小説でもアナキズム小説でもなく、移民排斥の時代の歴史書として読み、「英国人」になったばかりの「外国人」コンラッドの複雑な立場を浮き彫りにする。

第2部第4章(‘Following the Sea’)第5章(‘Going into Steam’)でコンラッド・コジェニオフスキが船乗りとなり海へ出るまでを辿った後、第6章では、ヨーロッパ主導の世界秩序が頂点に達した時期に(帆船から蒸気船へという)海運技術の途絶と、東洋(パトサン)に襲来した西欧文明が東洋の観念を侵食し、共同体を崩壊させていくさま——文明の終焉——を記録する歴史書『ロード・ジム』に、現在のデジタル文化の革命の行く末を重ねて読み込んでいる。第7, 8, 9章の3つの章に及ぶ「闇の奥」論の特徴は、ボルネオの川とコンゴ川を、そしてコンゴ川とテムズ川を合流させ、アフリカからの帰還(海の仕事)と次の(陸の)仕事の間の移行期に書かれた『オールメイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*, 1895)と「闇の奥」をそれこそ川を合流させるかのように交差させて考察している点だ。コンラッドは『オールメイヤー』の草稿を携え、ボルネオの川を頭の隅に置きながらコンゴ川を遡行し、帰国後はコンゴ川の思い出とともにボルネオの物語の執筆にとりかかった。そのことは、『オールメイヤー』のほとんどの(裕福な)登場人物が奴隷を所有していることと無関係ではなく、奴隷の絶望的状况に寄せる語りの共感には、コンラッドの宿命論的な人生観がうかがえるとジャサノフはいう(217)。また、彼女はオールメイヤーの妻とクルツの婚約者を並べてみることで(225)、「闇の奥」における人種差別的描写の場合と同じように、『オールメイヤー』における女性差別的表現を物語の中に埋め込み、コンラッドが偏見を強化すると同時に転覆もしていると指摘する(225)。

本書の圧巻はトビーンも言うように、『ノストロモ』を、アメリカの台頭、英国からアメリカへの覇権の移行、アメリカの国際的介入を先取りし、グローバル化の幕開けを予言する書として読む第4部10, 11章だろう。ジャサノフによれば、コンラッドはその幅広い経験から紡ぎだす過去の物語を、今のグローバルな世界の物語の序章にしてきた(257)という。つまり、『ノストロモ』の架空の国家コスタグアナの問題は、アメリカの台頭で英国の影が薄れたということではなく、英米がともに「物質的利益」につかえるようになったことであり(281)、その意味で、「新世界」についての物語『ノストロモ』は、現代の「新世界秩序」のほんの始まりの部分を取っているに過ぎないとジャサノフは読む。

ここまでコンラッドの人生と作品を通して帝国主義という暴力の歴史をあれほど具体的に暴き出していたジャサノフの筆は、最終章(第12章)でコンラッドをグローバル化の時代の予言者としてではなく、英文学の伝統への貢献者として論じはじめた途端勢いを失い、コンラッド批評における常套句をただなぞり始める。彼女は、『西欧の目の下に』(*Under Western Eyes*, 1911)と『チャンス』(*Chance*, 1914)の間に作風の断絶を看取り、『チャンス』以降にコンラッドの想像力の衰退を見ているのだが、『チャンス』をコンラッドの作家としてのキャリアの一つの分水嶺と考えるのはコンラッド批評における伝統的な立場であって、この立場では通常『チャンス』以降の後期作品——『勝利』(*Victory*, 1918)や『陰影線』(*The Shadow-Line*, 1917)を除く——を「闇の奥」や『ロード・ジム』等の最盛期の作品より高く評価することはまずない。案の定、ジャサノフも、後期作品の中でもさらに忘れ去られた晩年の歴史小説『黄金の矢』(*Arrow of Gold*) (1919)をメロドラマ(‘an awkwardly plotted melodrama’)、『救助』(*The Rescue*) (1920)を冒険ロマンス(‘an ungainly hybrid of ponderous romance and flaccid adventure’)と一蹴し、『放浪者』(*The Rover*) (1923)を「はっきりと歴史を題材にした小説」(‘a determinedly historical novel about an old French seaman coming home to his village during the Napoleonic wars’) (305)としながらも、それ以上踏み込んで論じていない。

コンラッドの歴史小説をコンラッドの正典の外に置いてきたコンラッド研究者が同じことを言うなら驚かないが、コンラッドの難解な代表作を歴史的背景にしっかりとつなぎ留め、「歴史小説」として読んでいた歴史家ジャサノフが、コンラッドの歴史小説にはほとんど興味を示さないとすると意味合いは少し変わってくるだろう。確かに、コンラッドの歴史小説は、出版当時も歴史小説として受け取られず、評判はよくなかった。現代の歴史家ジャサノフにとってもそれらは歴史小説と呼ぶに値しないということなのだろうか。先述の通り、あるコンラッド批評家は彼女がコンラッドの代表作を歴史の単なる「対象」にしたと言って批判していたが、どの作品がコンラッドの正典的な作品か(あるいは駄作か)という問題については、

両者は一致している。果たして彼女は本当に自分の目でコンラッドの歴史小説を読んだのだろうか。

コンラッドの見たものを見たかった(3-4) ——とジャサノフはプロローグで述べている。彼女は本書において、コンラッドがアフリカで確実に目撃したにもかかわらず「闇の奥」では詳細に描けなかったもの——例えば山積みされた夥しい数の切断された手——を、目を背けたくくなるような当時の写真とともに我々に見せる。彼女のアプローチは、コンラッドがアフリカの現実を目撃していながら「目に映るがまま」には必ずしも描いていない、つまり、「闇の奥」はアフリカ体験の忠実な再現とは限らない、ということを確認させてくれる。ジャサノフの歴史的アプローチが、コンラッドのいわゆる「秘密」という言葉をタイトルに持つ、謎めいた（つまり、コンテキストから限りなく自由な）物語、『密偵』や「秘密の共有者」(‘*The Secret Sharer*’, 1912)でどうも冴えないのは、このことと関係するのではないだろうか。『密偵』も「秘密の共有者」も、特に秘密の度合いが深く、多種多様な解釈を誘う点ではコンラッドの作品の中でも群を抜いている。故に何を言っても物足りなさが残るのだが、「秘密の共有者」に至っては、380 頁にも及ぶ浩瀚な本書の中でタイトルへの言及がたったの一回か所あるだけだ(298)。閉鎖された船上での黒人奴隷の反乱を描いたメルヴィル(Herman Melville)の短編「幽霊船ベニート・セレーノ」(‘*Benito Cereno*’, 1855)と比較されることもある「秘密の共有者」も、当時実際に起こった事件を基にしており、歴史的に検証することも決して無理ではなかっただろう。しかし、歴史家の彼女は、上述の歴史小説と同様、「秘密の共有者」に食指を伸ばさなかった。もちろんこれは偶然かもしれないし、今後彼女が本書では掘り下げなかったコンラッド作品をどこか別の場所で論じることはあるかもしれない。しかし、筆者には、コンラッドの歴史小説や「秘密の共有者」に対する彼女のこうした「沈黙」は、コンラッドの代表作に関する本書の議論に劣らず、コンラッドの言う「歴史」とジャサノフの言う歴史が必ずしも一致しないということを雄弁に物語っているように思える。

いずれにせよ、本書によって、コンラッドが *anti-imperialist* として再定位され、人種差別主義者という汚名が幾ばくか雪がれたことは確かだ、本

書の受賞によってコンラッド文学は今後より多くの読者に届くことだろう。しかし、そのことによって、彼女が無批判に支持してしまっているコンラッド批評の伝統的なパラダイムまで同時に拡散され、晩年の歴史小説が日の目を見るチャンスがまたしても遠のいてしまうとしたら、そして、コンラッドの歴史小説がもたらすかもしれない新たなコンラッド像の出現の可能性が抑えられてしまうとしたら残念だ。本書が、「闇の奥」や『ノストロモ』といったコンラッドの正典の反帝国主義的側面を強調すること——あるいはもっとはっきり言ってしまえば、帝国批判をするためにコンラッドの正典を選んだこと——によって、コンラッド批評において長く君臨し続けるパラダイムを反復・強化し、いわばコンラッド批評における「帝国主義」に加担してしまっているのは皮肉なことだ。英文学批評における「帝国主義」も歴史的に形成されたもので、ジャサノフがターゲットとしている英米主導のグローバリズムと決して無関係ではあり得ない——そのグローバリズムの影響下にある小さな島で、地中海沿岸を舞台にしたコンラッドの歴史小説を読む筆者の何重にも周辺化された位置からは少なくともそう見えた。

(やまもと かおる 滋賀県立大学 准教授)